

「渋沢栄一の源流 埼玉県深谷市を訪ねて」

細田木材工業(株)
顧問 細田 安治

ここでお断りしたいのは、「木は地球を救う— 25号」で川島康資氏のご縁の方とのインタビューの予定でしたが、手違いの為、お会いできず急遽変更しました。

そこで、先般日本資本主義の父と言われ、新1万円札の肖像に決まった「渋沢栄一の源流を訪ねて」をレポートします。ご容赦を賜りたく御願ひ申し上げます。

東京商工会議所江東支部主催 渋沢栄一初代会頭 新紙幣肖像決定記念視察会と銘打ち「渋沢ゆかりの地深谷を巡る視察会」に参加した。有名人渋沢栄一については数々の紹介がなされているが、現地視察並びに参加された方のなかに渋沢栄一の遠縁に当たる方のバス車内での講演からの切り口から渋沢栄一の素顔と功績をレポートします。

深谷市に向かうバスの2時間余りの時間に佐々木幸耀氏から渋沢栄一の生家の紹介が始まった。

「^{なかんち}中の家」

渋沢一族はもともとこの地、血洗島の開拓者として、それぞれに分家し数々の家を起こした。この地にくる前の出身はどこか定かではなく会議所の資料や記念館でも出身地の紹介はなかったが、佐々木講師の説明で山梨県から来たと紹介された。ここで学んだことは、書物も大事だが、人の生の声ほど大事なものは無い、と実感した。話を「中の家」へ戻す。数々の分家の家の呼称が「中の家」である。ここでもう一つ、関東弁で自分の家を何と言うか。「俺んち」と言う。筆者の生まれ遠州浜松在だが育ちは東京深川、自分の家を「俺んち」お前の家を「お前んち」または「君んち」と呼んでいる。なるほど「俺んち」「お前んち」「君んち」の語源は深谷にあったか。また一つ学んだ。

「^{ちあらいじま}血洗島」

もうひとつ気がついたことは、血洗島とは、一体何だ。この語源がわからない。血洗うとは物騒な話なので質問すると、深谷は利根川の支流が入り乱れた沼沢地で水害に悩まされていた。江戸時代には水田を作って稲を植えても水害で押し流されてしまう。作っても、土、土地が押し流され米の収穫はできない。「土地が流される」から「地が流される」が「地が洗われる」が農民の1年間の血の



渋沢栄一



中の家の主屋

にじむような苦勞が洪水のため一瞬にして流されてしまう。「農民の血のにじむような努力が流される島」と話された。農民の血が一瞬にして流された島、なるほどと納得が言った。これも人の話は「聞け、聴け」と学んだ。「土地の地」と「農民の血」のにじむような努力の両方をかけて血洗島としたのではないか。

「中の家」なる呼び名もその一つで、各洪沢家の位置関係を表している。「中の家」の当主は代々市郎右衛門を名乗っていた。栄一の父元助は親戚の「東の家」から男子のいない「中の家」に養子に入り市郎右衛門を名乗った。学問に長け勤勉律儀、農家の他に養蚕や藍玉づくりとその販売で財をなし、一時傾きかけた家運を再興した。

「稲作不可能から養蚕と藍玉」

この地は水田が出来ない。そのため農家は稲作の代わりに藍玉を生産したとされている。過酷な環境からコメづくりを諦め生活の糧を、養蚕と藍玉作りに見出したのではないか。ドラッカー流に言えば、米作りはできず、養蚕と藍玉づくりに転換したイノベーションは江戸時代の士農工商身分制度が厳しく制限されていた時代に、^{かいこ}蚕の^{まぐわ}餌桑づくり、藍玉の原料である藍の葉づくりなどなど、素晴らしいイノベーションと、これら事業を成功させた歴代の市郎右衛門、なかでも特に栄一と栄一の父市郎右衛門の功績は素晴らしいマネジメントではないかと気がついた。流石は日本資本主義の父と言われる洪沢栄一の原点はここにあり、そして源流となって洪沢の生き様が形成されたのではないか。

◇洪沢栄一人間形成 — 1

藍玉とは染物の原料である^{たであい}蓼藍の葉を乾燥し、次に水につけて発酵させ藍ができる。これを運搬しやすいように固めたものが藍玉である。米一石一両の頃、六寸の藍玉は米と同じ値段で取引されるほど高価でしかも必需品であった。

洪沢栄一は父の供をして藍葉の仕入れをし、商売のコツを掴み14歳で父の代わりをするほど商いの才能があった。ここに、番付を考案して農家の藍玉造りの品質向上に努めた栄一の詳細を垣間見た。それは洪沢栄一記念館に展示してあった藍玉番付である。解説書に書かれてある。

◇藍玉番付

洪沢栄一の生家、「中の家」は藍玉栽培と藍玉商を営んでいた。栄一の父市郎右衛門の法名は「藍田」の二字が含まれていることからもうかがわれる。少年栄一は祖父に代わって上質の藍玉を安く仕入れ父を驚かせた。青年時代から藍玉商売の為尾高惇忠と信州に出かけている。

栄一は、雨夜話のなかで「藍の取引先を招待する時は、相撲の番付のような表を作り、一番品質の良いものを作った農家を上位につけ同業者を奨励した」と話している番付の、勸進元「東の家」洪沢宗助「中の家」洪沢市郎右衛門「新屋敷」の洪沢文左衛門の御三家の長と、甥の尾高惇忠が務めている。番付の行司は、洪沢家の若き従兄弟の宗五郎、栄一郎、嘉作とし公平を期すため名前を書きだした番付表は文久二年のもので、相撲の番付に例えて品質を競わせた栄一の才覚がうかがえるものだ。

◇洪沢栄一の人間形成 — 2

洪沢の17歳の時、村をおさめていた岡部藩から呼び出され500両の御用金抛出を命じられた。病の床にあった父に代わり出頭した栄一は、自分は父の名代である。御用金の件は帰って父と相談する、として即答を避けた。

役人は職権を嵩に即答を迫ったが、栄一は主張を最後まで曲げなかった。帰ってから父と相談して結局は500両を納めることになったが、栄一は、この時の役人の横暴さに対する怒りが後に身分制度に対する疑問を抱かせ、のちの倒幕の企てや、一旦奉職した明治政府を辞し、官尊民卑の打破を目指すことに繋がって行く。

◇ 渋沢栄一人間形成 — 3

惇忠の母「やへ」は栄一の父市郎右衛門の姉にあたる。惇忠は栄一の10歳年上の従兄にあたる。幼少より書を好み17歳の頃には家で塾を開き、近隣の子供達に教える様になる。栄一にも論語を始めとする学問を教え、大きな影響を与えた。

◇ パリ万博とヨーロッパ視察

慶応2年(1866)に栄一は徳川慶喜の幕臣となる。翌慶応3年、慶喜の名代として慶喜の弟徳川昭武「後の水戸徳川家11代当主」に随行してフランスのパリで行われるパリ万博を視察した。万博終了後、昭武についてヨーロッパ各地を訪問する。

各地で先進的な産業や軍備を視察すると共に、ヨーロッパ各国の先進的かつ合理的な社会、経済の仕組みを知り感銘を受ける。

帰国後静岡に謹慎していた慶喜に面会、静岡藩より大蔵省に出仕を命ぜられる。このとき慶喜からこれからは「お前の道を歩みなさい」と言われた。これが慶喜の偉いところだ。栄一を昭武の随員とは言え、自分の名代としてパリ万博はじめ数年間にわたりヨーロッパ各地を回遊し学ぶ機会を与えたこと。慶喜は徳川最後の将軍として、無血開城、大政奉還を成し遂げた偉人であると筆者は認識している。慶喜については機会があれば、偉人としての人となり生きざまを調べてみたい。

慶喜の松戸にある別荘には数回訪れた程度で詳細については情報が不足している。機会を見つけて、偉人として慶喜の生きざまを書いてみたい人物である。

話を戻す。慶喜から「お前の好きな道を歩きなさい」と言われ新政府出仕後、フランスで学んだ数々のことを実行した。

栄一の人格形成は、

1. 幼少から藍玉商売で学んだ商魂による現金仕入れと掛売りの資金繰りにより、銀行の必要性と、この商いの経験からヨーロッパ駐留時代に近代的な経済システムを理解し、近代的な合理主義思想につながった。

2. 17歳の時、役人の横暴による官尊民卑の打破

3. 尾高惇忠から論語の教え

4. 商工業者をまとめる世論の形成

5. 論語と算盤

6. そして自らが持つ天賦の才能

これらが合体して資本主義の父と言われる渋沢栄一が出来上がったと見るのは早計か？ 続く